

ピアノ・ソナタ 第5番 ハ短調 op.10-1

ベートーヴェンが初めて3楽章構成で書いたピアノ・ソナタである。彼が好んで使ったハ短調で、第1楽章で繰り返し奏でられる和音と上行音型が印象的に響く情熱的な曲。同じハ短調で書かれた《悲愴》ソナタや《運命》交響曲と同じ変イ長調による第2楽章は、12連符や6連符といった細かいパッセージが多いが、これらはただ装飾的なものではなく、全てが主題や動機と関連するような動きをしており、ベートーヴェンの徹底した構成美の追究が見えてくる。

ピアノ・ソナタ 第12番 変イ長調 op.26

ソナタ形式の曲が置かれておらず、第1楽章が変奏曲となっている。しかしこれはすでにモーツァルトが《トルコ行進曲付き》ソナタで行なっており、ベートーヴェンも同曲を意識して書いたと推測される。モーツァルトがメヌエットとした第2楽章をベートーヴェンはスケルツォに、「トルコ行進曲」の第3楽章は「葬送行進曲」、さらに第4楽章を追加していることから、先人の作品を意識しつつ、新しいものを生み出そうとした意図がうかがえる。

ピアノ・ソナタ 第22番 ヘ長調 op.54

前曲と第23番との間に挟まれた本作は、特異な存在感を放っている。2楽章から成り、どちらの楽章も同じヘ長調。さらに第1楽章冒頭には「メヌエットのテンポで」と記されているが、メヌエットの形式では書かれていない。また《ワルトシュタイン》の第2楽章になるはずであった「アンダンテ・ファヴォリ」との相関性も見出すことができる。なお、こちらの第2楽章は、右手と左手による対話を思わせるロンド風の商品。

ピアノ・ソナタ 第17番 ニ短調 op.31-2 《テンペスト》

「ハイリゲンシュタットの遺書」をしたためたベートーヴェンであったが、死ではなく、芸術家としての使命を全うする決意を固め、「私は今までの作品に満足していない。今後は新しい道を進む」と、新しい作曲手法の創作に挑み始める。このソナタはまさにその頃に書かれたもの。唐突に楽想が変化する本作について、理解のための助言を求めた弟子のシントラーに、ベートーヴェンが「シェイクスピアの『テンペスト』を読み」と言ったことから、この曲の通称が生まれた。もっとも愛奏される第3楽章は16分音符による音型が終始、

様々な調へと移りながら止まることなく奏されるが、この無窮動風の曲調は、弟子であったチェルニーによると、馬車の走行から着想を得ているという。

ピアノ・ソナタ 第18番 変ホ長調 op.31-3

全体的に優雅な雰囲気に含まれているが、第1楽章の冒頭から調性が不明瞭で、リタルダンドが多用されるなど、「新しいもの」を創作しようとしたベートーヴェンの創意工夫に満ちている。第2楽章には通常、緩徐楽章が置かれるが、ここでは快活なスケルツォとなっており、しかも通常3拍子を使用するところに2拍子が選ばれている。第3楽章はメヌエット、第4楽章はタランテラ風。1曲のソナタの中にスケルツォとメヌエットが並存する興味深い曲だ。